

白水瓢塚古墳調査成果報告会資料

平成15年9月6日

神戸市教育委員会文化財課

1. はじめに

しらみずひまごづか
白水瓢塚古墳は、神戸市西区伊川谷町潤和字シント山に所在する古墳で、明石川の支流である伊川の右岸の丘陵頂部に位置します。標高約60mの薬師山山頂に造られた古墳時代前期の前方後円墳で、「白水夫婦（妻）塚古墳」「白水薬師山古墳」とも呼ばれていました。大正末から昭和初年に行われた直良信夫氏の調査により、3重の円筒埴輪を巡らし、周囲に100基以上の埴輪棺が存在すると推定されていました。

昭和61年以降、古墳周辺の開発工事に伴い、10次に及ぶ発掘調査を実施してきました。その結果、墳丘の規模、埴輪列、前方部の埋葬施設、墳丘周辺の8基の円筒埴輪棺等が確認されました。

今回の調査を実施した後円部は、昭和50年代前半に盗掘を受けており、平成13年度に盗掘を受けた箇所わりたけがたもつかんの損壊状況の確認調査を実施しました。その結果、割竹形木棺を粘土で覆った粘土ねんど柳かと呼ばれる埋葬施設の存在が確認され、南北方向に鉄製品（刀または剣）が抜き取られた痕跡が確認されました。

今回の調査は、被害状況の詳細な調査と遺物や遺構の保全を目的として埋葬施設の調査を実施しました。

2. 調査の概要

調査の結果、ほぼ真北方向に掘削された長辺7.3m、短辺4.1m、深さ約1.1mの墓坑掘形から、長辺6.4m、短辺1.9～2.4mの粘土柳が検出されました。盗掘の影響は粘土柳の西半部の約2分の1に及んでおり、抜き取られた鉄製品は、木棺外に位置することがわかりました。

粘土柳上 墓坑の埋土を除去していく過程で、木棺の腐朽により陥没したと考えられる落ち込みから、本来墳丘上に存在したと考えられる拳大の自然石や埴輪片、土師器片が少量出土しています。土師器片は4個体分程度あると考えられますが、現在詳細は不明です。

粘土柳 粘土柳の範囲は、墓坑の東側に寄っています。中軸付近は、木棺の腐朽による陥没で、粘土と墓坑の埋土が落ち込んでいましたが、北側および南側の小口部分は、その影響が少なく、本来の位置を保っていると考えられます。

北側部分の小口部分の被覆粘土には、棒で粘土をつき固めたような痕跡が認められます。また、被覆粘土の上面だけでなく、構築途中にも自然礫を敷き並べていることが確認されました。粘土を被覆する工程に、鉄製品の副葬や顔料や礫を使用する葬法や、粘土柳の構築過程を復元するための良好な資料です。

木棺内 木棺内は、西半部分は底面付近まで盗掘の影響が及んでいましたが、遺物の位置は乱されていませんでした。

調査継続中であり木棺の正確な規模は不明ですが、粘土床の痕跡と、棺の小口に充填された粘土の痕跡により、全長440cm以上、内側最大幅55cmの割竹形木棺と考えられます。

木質は、一部を除いて失われていますが、棺身の内側に塗られていた赤色顔料が、ほぼ全面で確認されました。

蓋は本来の位置を留めていませんが、床面で間層を挟む2層の顔料が確認された箇所があり、蓋

にも顔料が塗られていたと考えられます。

被葬者の遺体はまったく残っていませんでしたが、赤色顔料が特に濃い箇所は玉類が集中しており、頭から胸の辺りに相当すると考えられます。南側に遺物の出土が見られないことや、木棺底が南側にわずかに傾斜していることなどから、頭位は北であると考えられます。棺内に副葬された遺物の配置を整理しますと、頭の位置の北側に鉄製品（刀子^{とうす}）を1点、鏡を1面、さらに北側に腕飾類^{わんしよくるい}が置かれています。玉類は、頭部と考えられるところに小型の勾玉^{まがたま}と管玉^{くだま}、胸の両側に小型のガラス玉、胸の中央に3cm程度の長さの勾玉と管玉が置かれています。

閉塞粘土 木棺の両小口付近に、仕切り板の固定もしくは小口の閉塞に使用された粘土塊が検出されました。双方ともに赤色顔料が確認され、外周径は木棺の痕跡の内径とほぼ一致します。

北側の閉塞粘土の下半部分はおぼ垂直に立ち上がり、上半部分はドーム状になっています。下半分の平坦面は、棺身の部分に仕切り板の存在を示す痕跡かもしれません。

南側の閉塞粘土は下半部分が崩れており、形状は不明ですが、上半部分は北側と同様にドーム状になっています。閉塞粘土の外側にも赤色顔料の痕跡が確認できますが、蓋の顔料が付着したものである可能性があります。

遺物

棺内からは、鏡1面、石製腕飾類、玉類、不明鉄製品が出土しました。

石製腕飾類 石釧^{いしくしろ}9点、車輪石^{しゃりんせき}4点が重なった状態で出土しました。石製腕飾類の出土数としては県下最多です。石釧、車輪石ともに、異なる型式のものが一括して発見されており、形状の変化やセット関係を考える上で良好な資料です。石材は北陸地方の緑色凝灰岩と考えられます。

鏡 ほぼ棺の中軸上に位置し、鏡面を上にした状態で検出されました。鏡の上面および周辺には木質が残っており、木棺の蓋または箱の部材であると考えられます。鏡の種類や材質は現在調査中のため、明らかではありません。

玉類 木棺のおぼ中央部に赤色顔料の彩度が高い箇所があり、玉類の出土はこの付近に集中しており、ガラス小玉300点以上、石製の勾玉5点、石製管玉40点が検出されました。出土位置は、中軸に近い箇所に勾玉と管玉が多く、東側には直径3mm程度のガラス玉が、西側には直径1mm程度のガラス玉が多く検出されました。

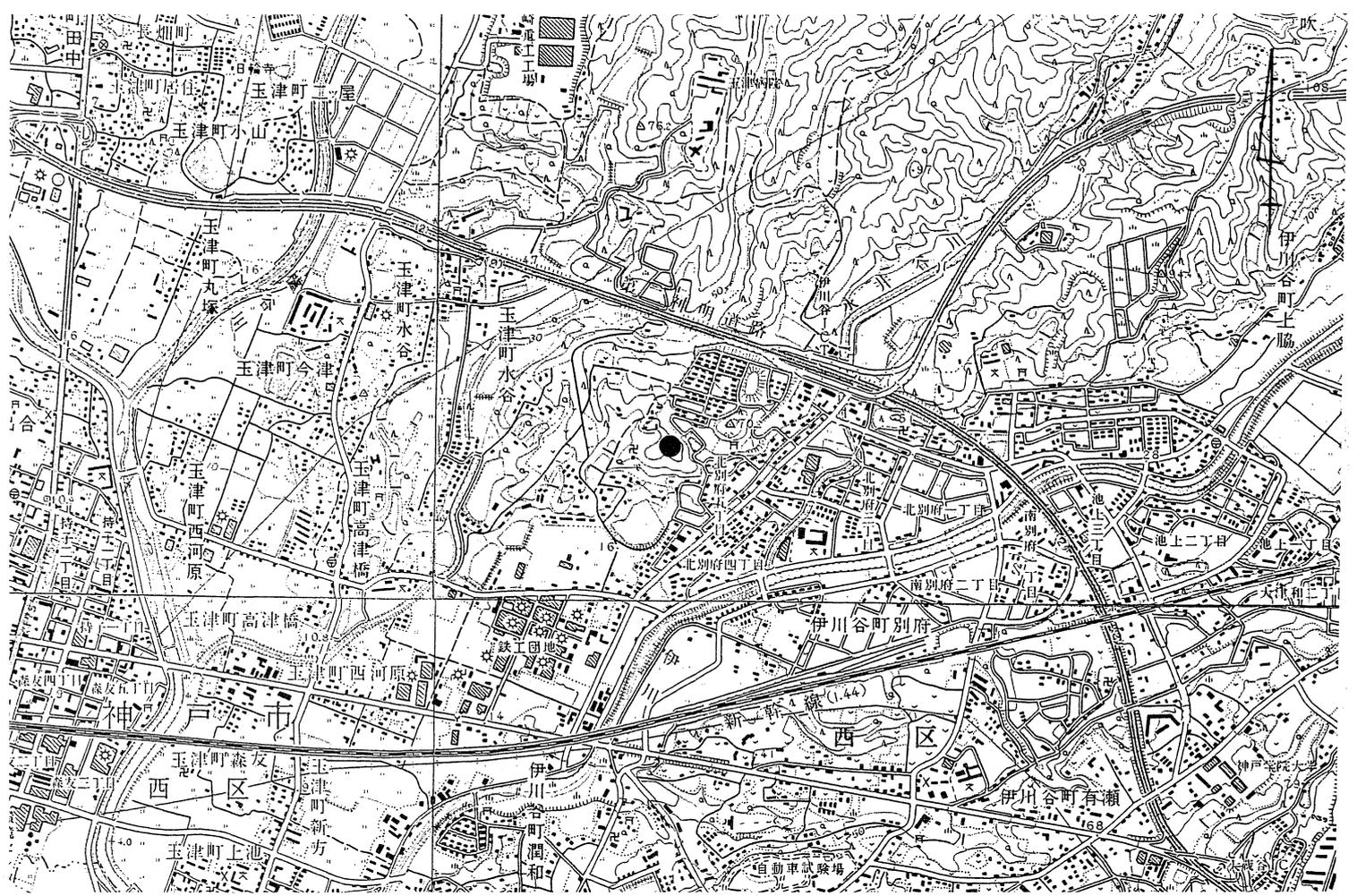
鉄製品 鏡が出土した位置から約10cm南で鉄製品が1点出土しましたが、錆で覆われており、詳細は不明です。

3. まとめ 調査継続中であるため、埋葬施設の下部の構造や遺物の内容については不明な点も多くありますが、古墳時代前期における畿内周辺部の首長墓の様相を示す良好な資料を得ることができました。

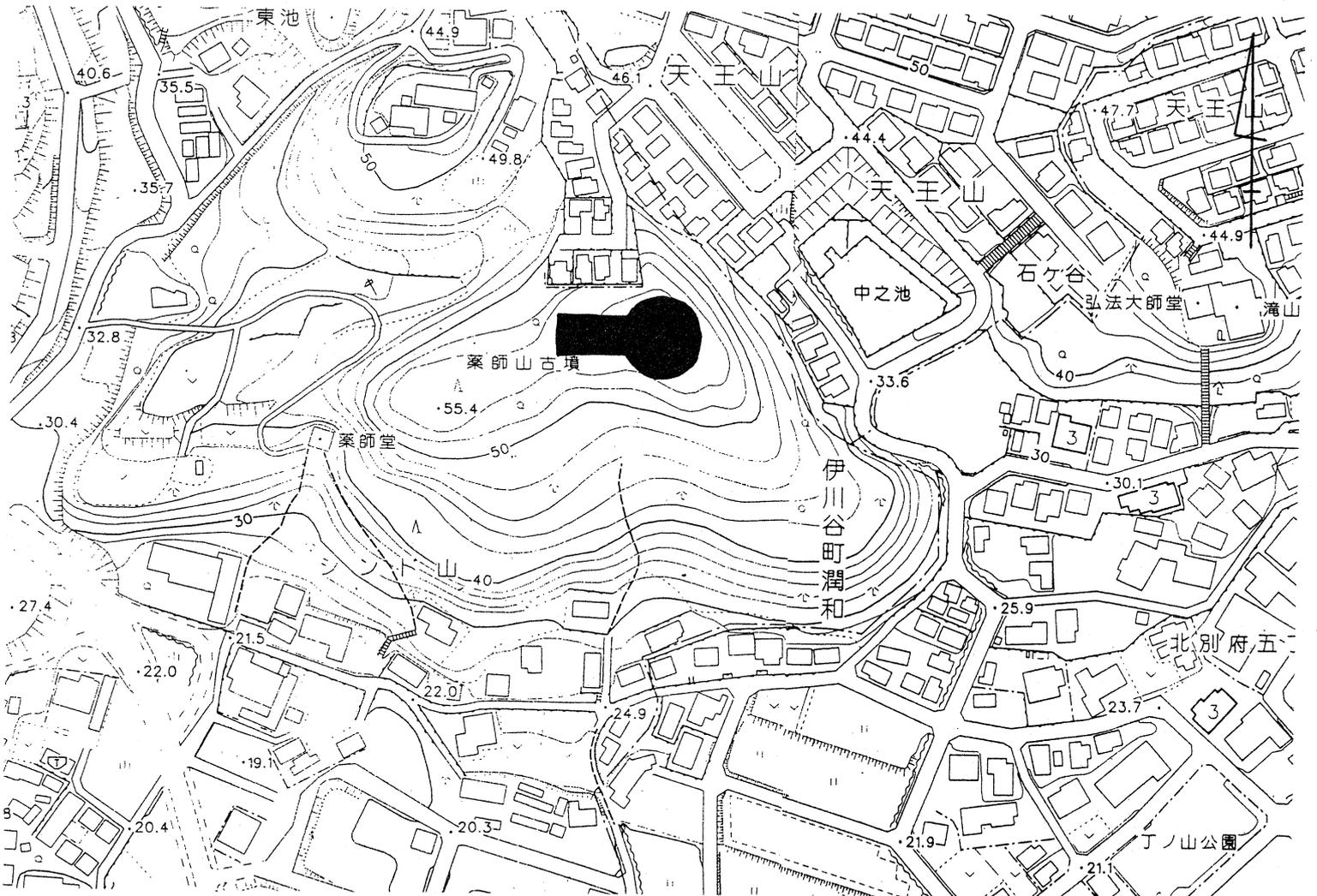
今回の調査は、良好に遺存した粘土槨が確認され、粘土槨の構築手順や副葬品の配置状況を確認できる資料に恵まれました。特に木棺内の遺物が原位置を保ったまま検出できたことが大きな成果と言えます。

出土遺物のうち、腕飾類と玉類の数の多さは特徴的で、棺内に武器類の副葬もないことから、被葬者は女性であった可能性があります。

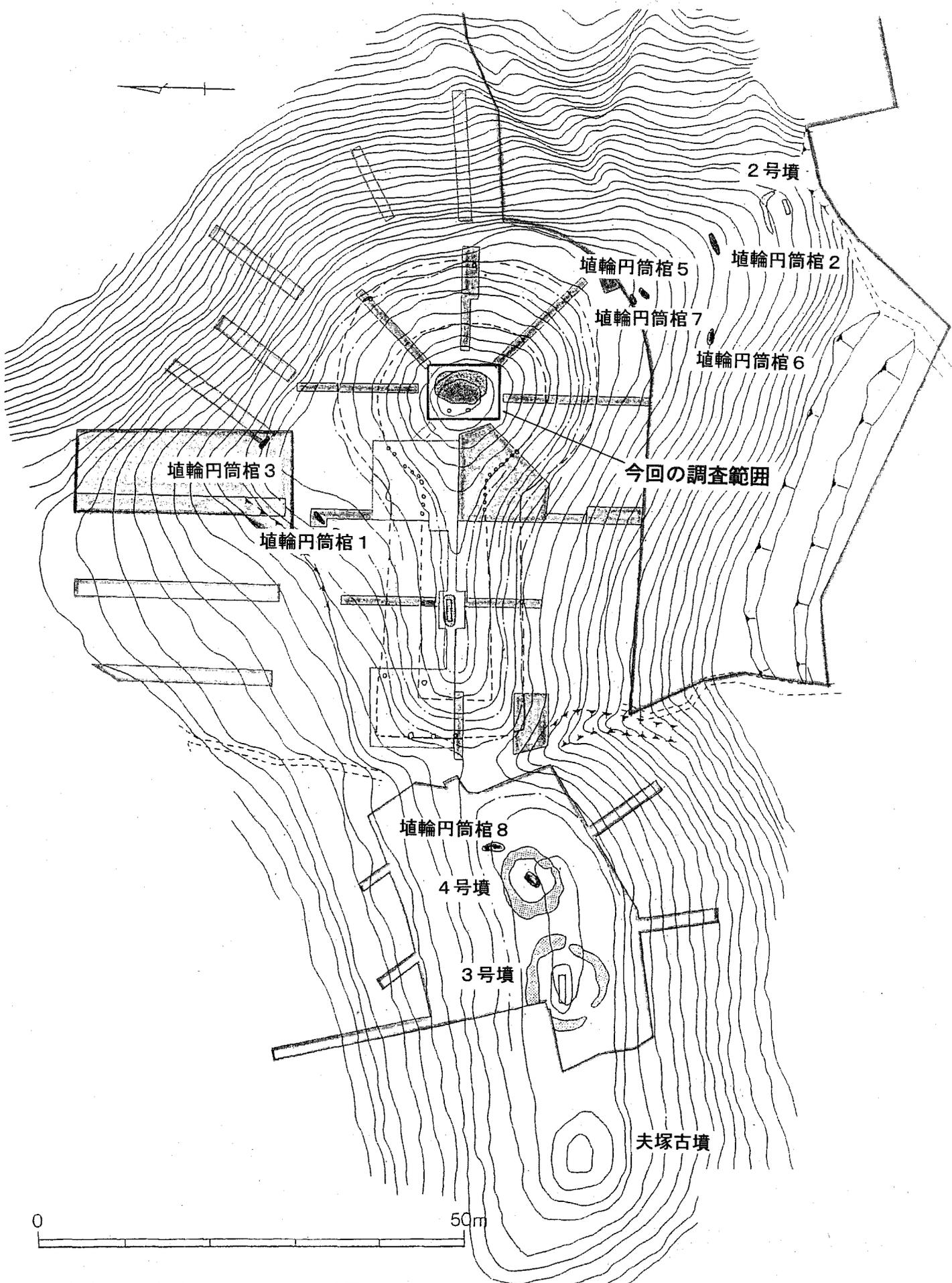
今後、鏡の型式や埋葬施設の下部構造が明らかになれば、この古墳の時期や性格がより明らかになると考えられます。



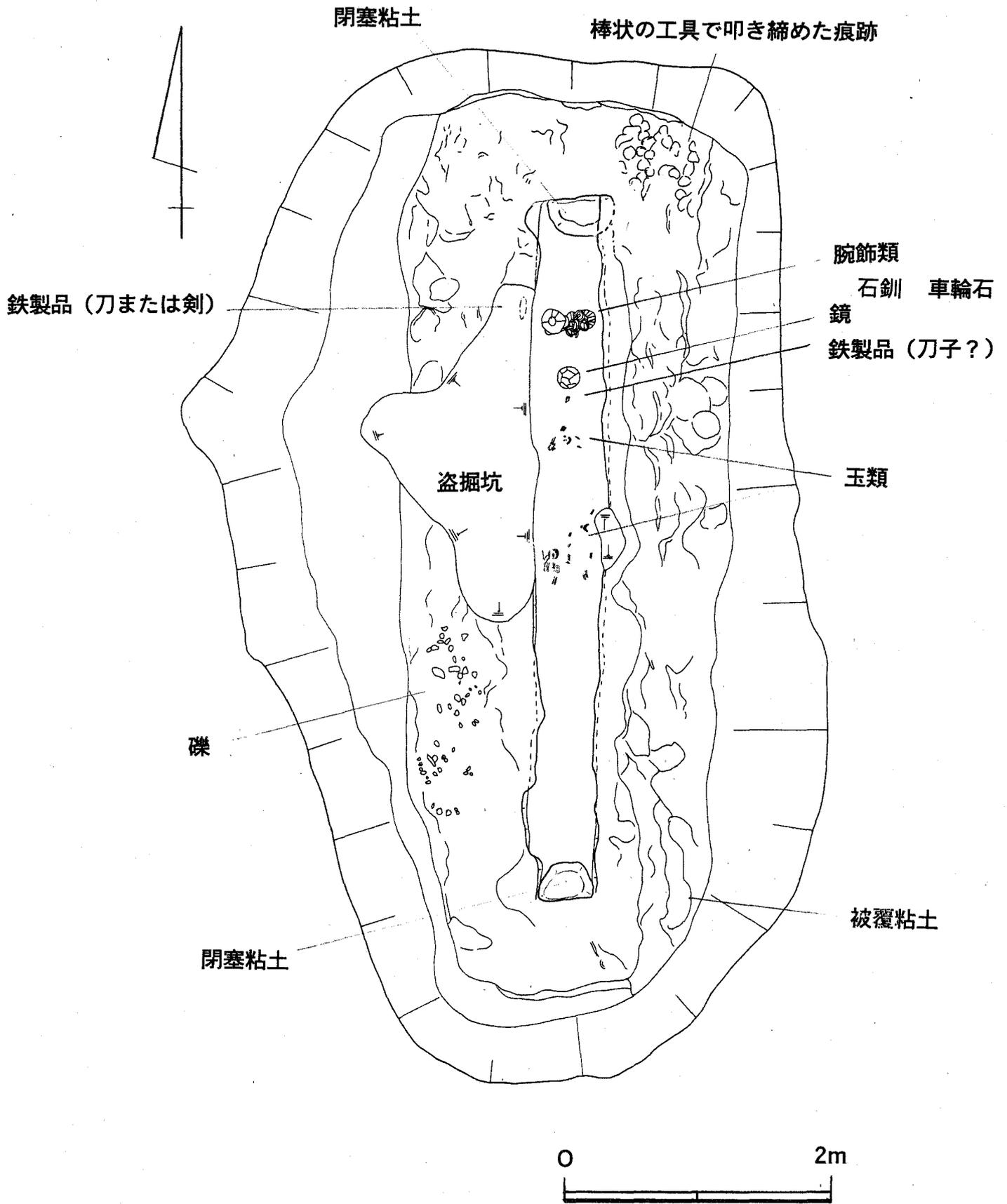
調査地位置図 S=1/25000



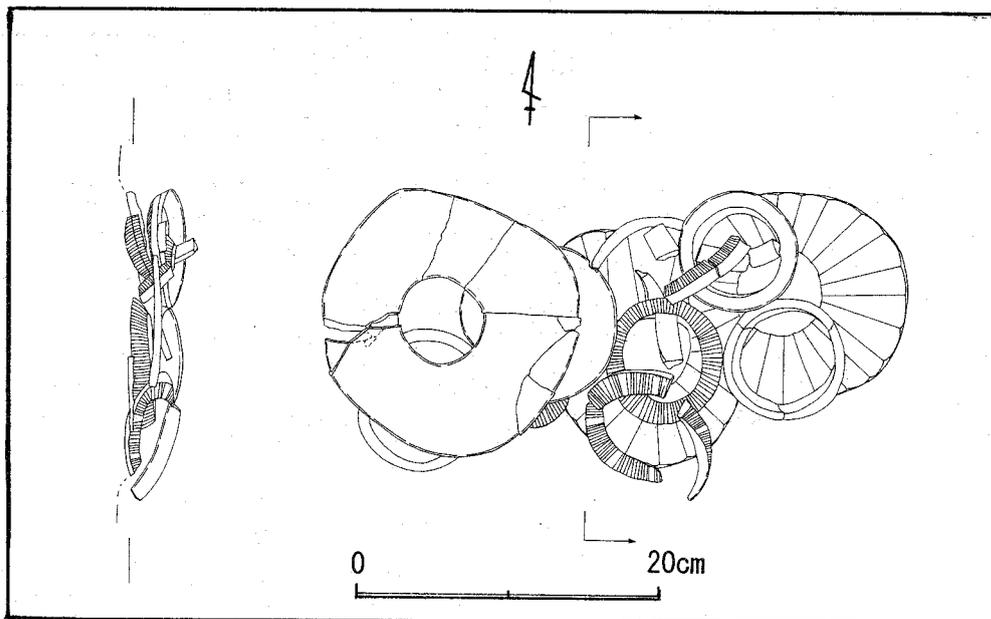
調査地位置図 S=1/2500



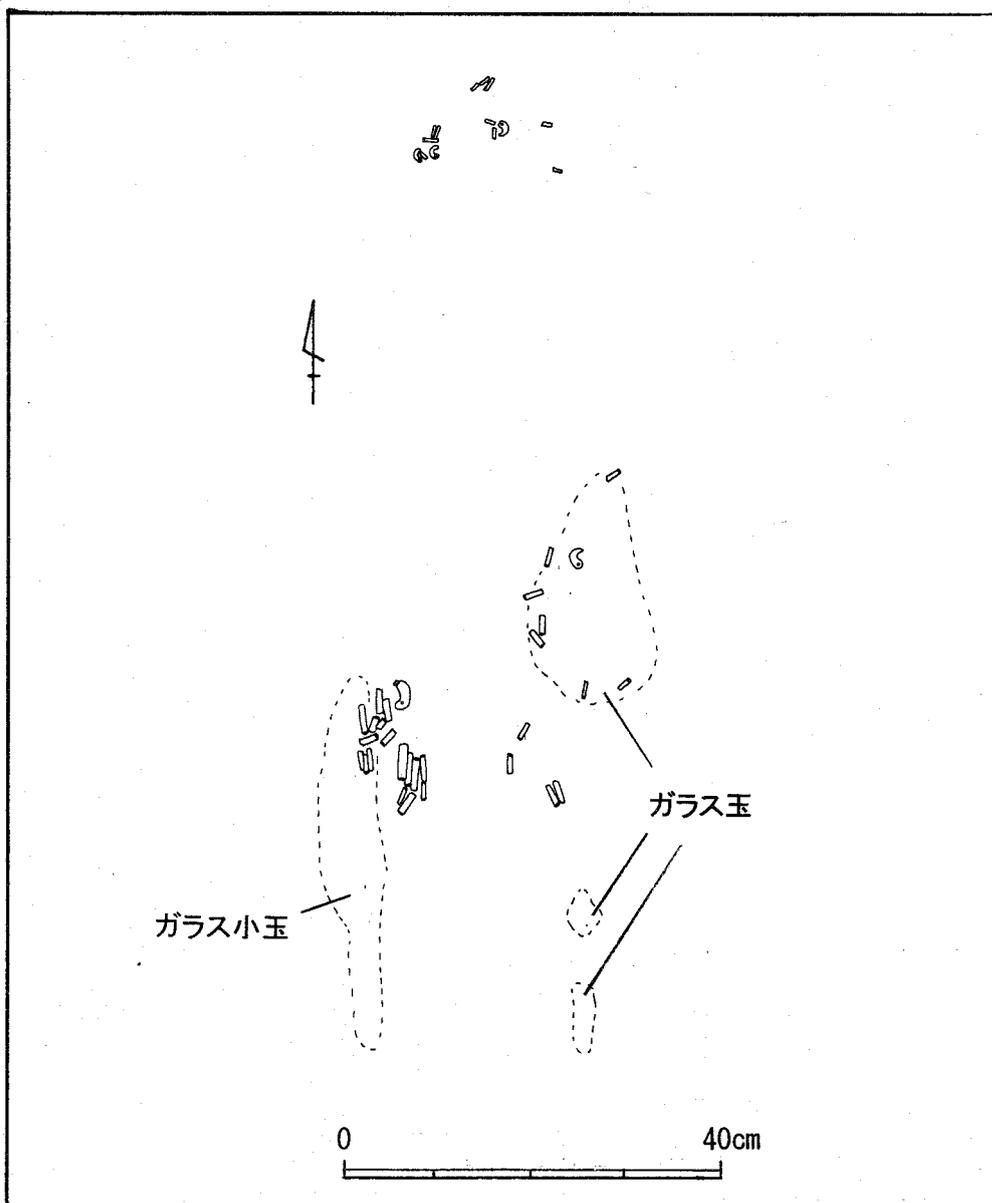
白水瓢塚古墳および周辺地形図(1 : 600)



後円部主体部平面図



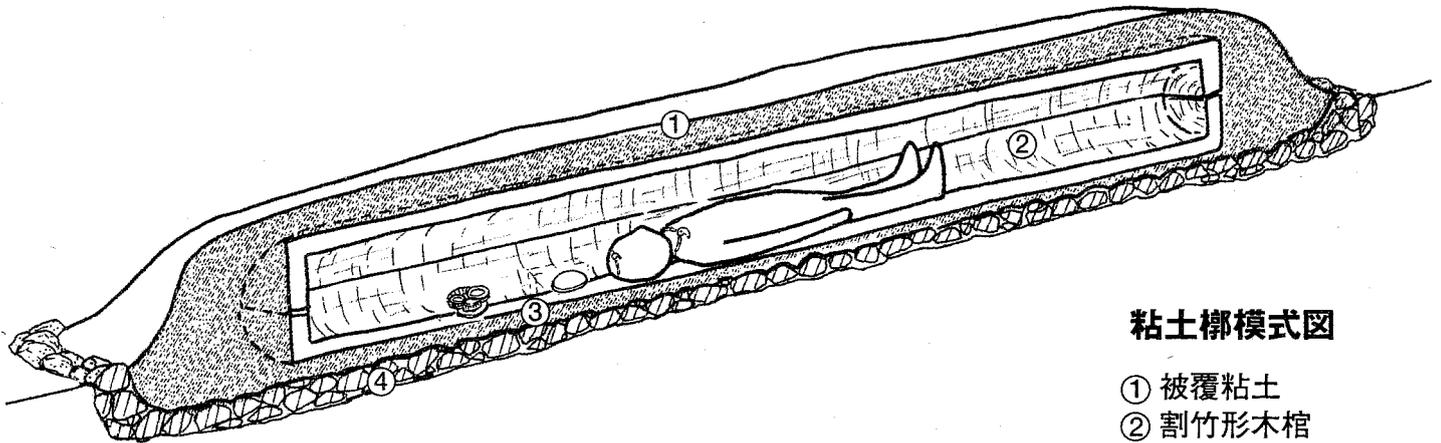
腕飾類出土状況平面図



玉類出土状況平面図

◆出土遺物と数量◆

出土遺物	棺内	石釧	9点	
		車輪石	4点	
		管玉	40点	
		勾玉	5点	
		鏡	1点	調査中のため詳細不明
		鉄製刀子?	1点	
		ガラス玉	300点以上	
	棺外	鉄製品	1点	刀? 剣?
	被覆粘土上	土師器	4点以上	



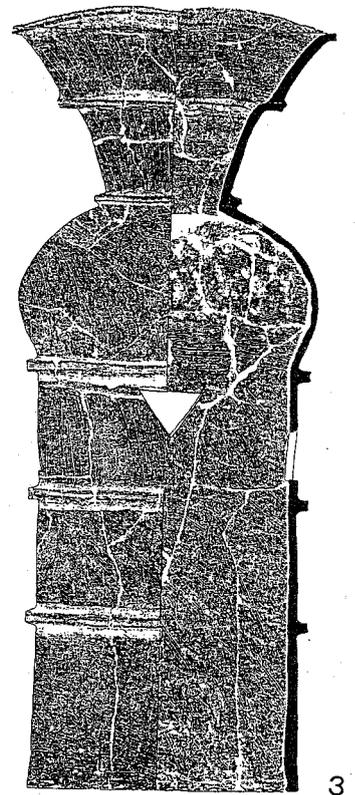
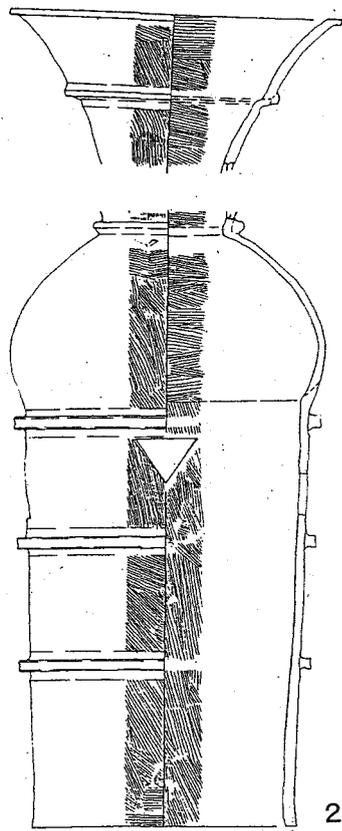
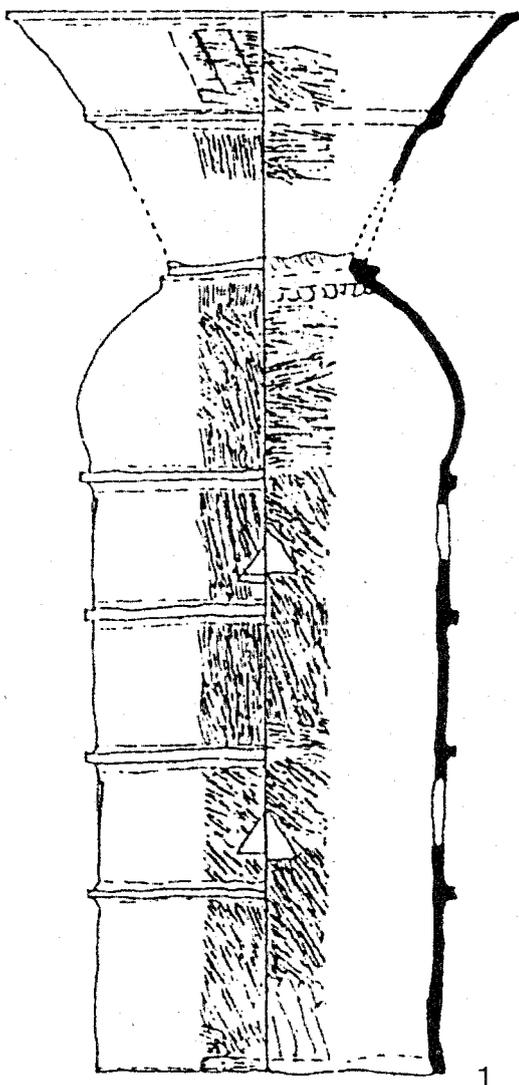
粘土槨模式図

- ① 被覆粘土
- ② 割竹形木棺
- ③ 粘土棺床
- ④ 磔敷

企画展示図録 『神戸の古墳』 神戸市教育委員会2000 を改変

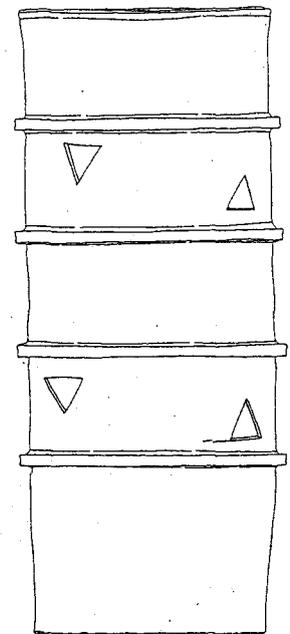
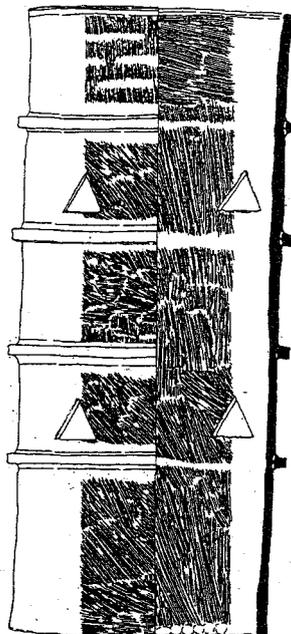
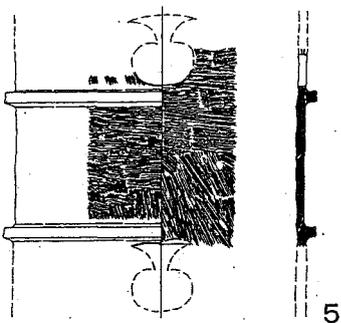
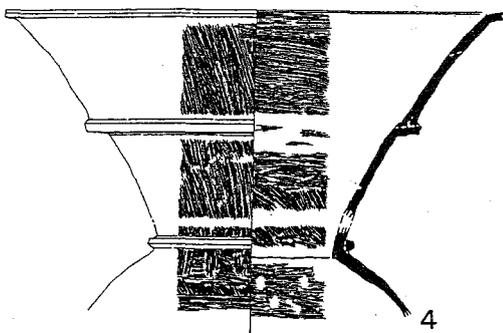
順序	粘土槨	内容
1		墓坑の設定・掘下げ
2		墓坑底を整える、磔床などの設置
3		棺床の設置
第一段階	4	棺身の搬入
	5	構築中断 第1段階(棺内・印)配列 4～5の間に被葬者を納棺した可能性が高い。
	6	(竪穴式石室側壁の構築開始) ただし4・5の前に一定の高さの側壁・控積みが施行されていた可能性もある。

第二段階	7	棺蓋の搬入 ただし、この段階においても側壁・控積みがなされていない可能性もある。
	8	構築中断 第2段階(棺側・棺蓋上△印)配列
	9	↓ 8～9の間に副葬品が配列されることもある(別主体・石室壁体内・裏込め内への配列)。
第三段階	10	(竪穴式石室一天井石の搬入) 粘土槨-被覆粘土の施行 9～10の間に壁体上端に副葬品が配列される例もある。
	11	構築中断 第3段階(石室外・粘土槨外×印)配列
	12	埋葬施設の被覆 11～12の間に土器を収める例がある。12以降、埴輪など配列される。



0 50cm

- | | | |
|---|--------------|---------|
| 1 | 埴輪円筒棺 2 西棺 | 朝顔形円筒埴輪 |
| 2 | 1号棺 (直良氏調査) | 朝顔形円筒埴輪 |
| 3 | 埴輪円筒棺 7 | 朝顔形円筒埴輪 |
| 4 | 埴輪円筒棺 3 (閉塞) | 朝顔形円筒埴輪 |
| 5 | 埴輪円筒棺 3 (閉塞) | 円筒埴輪 |
| 6 | 埴輪円筒棺 3 | 楕円形円筒埴輪 |



[参考資料] 白水瓢塚古墳周辺で発見された埴輪